

第3章 災害情報

第1節 はじめに

『新収日本地震史料』によると^{注1)}、弘化4（1847）年3月24日夜10時ごろに起きた地震を感じたのは、東は山形県北村山郡大石田町、西は兵庫県豊岡市とされる。この広い範囲を揺るがした地震の震源が長野市北部であり、江戸時代には「信濃大地震」、「信越大地震」、「弘化大地震」などと記録され、今では一般に善光寺地震と呼ばれている。

折りしも善光寺では、3月10日から六万五千日回向の開帳が始まっており、全国から参堂する人々を含めて、災害全体の死者が1万人以上といわれる大災害となった。

この大地震の情報はどうのように人々に伝えられ、広がり、記録されたのだろうか。ここでは地震後に見られる様々な災害情報について、最初に文字による災害情報を、次いで読売、災害絵図、地震口説きなどの摺物など、不特定多数の第三者に向けて発せられた災害情報について、最後に現地に残る絵馬や供養塔などの石造物から、災害情報を後世に伝えようとする人々の思いについて見てみたい。

第2節 文字・うわさによる災害情報

信州での地震被害の情報を最も早く江戸へ伝えたのは、武士であったと思われる。各藩では自領の被害概況を、真っ先に江戸にいる藩主や江戸詰へ、あるいは幕府への届出として情報を発信した。幕府領では、各代官が幕府への被害報告を最優先に行っている。伝達には飛脚などが使われ、文字情報としての書状として届けられた。以下、各領主からの災害情報について幕府への報告から概観する。

被災地から幕府への報告を一覧にしたのが表3-1である。最も多くの領地が被害を受けた松代藩では、地震発生から2日後の3月26日付で、およそ次のように幕府に地震被害を報告している。3月24日亥刻（夜10時ごろ）大地震があり、松代城の住居や櫓などが破損し、家中及び城下、諸村の潰屋、死人が多いこと。さらに、山抜けにより犀川がせき止まり、丹波島の渡し干上がったこと。この決壊に対する不安を記し、委細は追って申し上げる、と結んでいる。家老河原綱徳の記した『むしくら日記』^{注2)}によると、河原は地震発生から約2時間後の丑刻（夜12時ごろ）過ぎに御用状を認め、早飛脚を江戸に向けて申しつけている。江戸藩邸への報告と思われる。

須坂藩では3月26日付で、陣屋（城）と家中の被害、領内の家屋倒壊被害、田畑地割れの箇所があること、余震が続いていることを幕府に報告している。次いで領内では、人馬けがはないが、善光寺参詣、又は、出稼ぎ人の内で死者があるとの伝聞を書き添え、取り調べの上追って報告する、としている。他の大名領でも、まず城の破損、街道上の宿場の被害、次いで城下、領域の被害が報告されている。

幕府領では、中野代官所高木清左衛門が3月25日付で、24日戌中ごろ（夜8時ごろ）から亥上刻（夜10時ごろ）にかけて大地震が起り、まだ揺れ続けているとし、預所でも人馬や家屋の倒壊などの被害が大きいことに加えて、預所では出火の報告はないが、隣接する飯山城下で大きな被害が出ていると報告している。

中之条代官所の川上金吾助は、預所の内水内郡村々の報告はまだないが、川中島平の被害が大きいこと、善光寺町は多くが焼失したこと、佐久郡は被害が少ないことなどを地震の翌日、3月25日付で報告している。

松代藩では4月12日、第3回目にあたる幕府への報告の中で、「山中筋は犀川が湛水した上、道路が多分に抜けくずれ、往来できない場所も多く細かく調査できない場所もある。去10日迄で判明した城下町より山里村々のおよその潰家、半潰家はともに8,747軒。死人怪我人3,924人。斃牛馬235疋程」と、初めて具体的な数字を報告している。

次に、ちまたでの災害情報の広がりについて、うわさも含め県内の武士や名主、本陣などの日記を見る。上田藩士の稲垣家の日記には、広汎で詳細な地震情報が記されている。まず24日に、海上で大風にあった船のように揺れた地震であったと記されている。以下、時間を追って内容を摘記する。

25日、善光寺と稲荷山では火災で多くの死者が出ている。特に善光寺旅籠藤屋という大家には、旅人5~600人ほどが宿泊していたが、逃げ出したのはわずか30人ほどである。

26日、善光寺、川中島平、矢代（千曲市）、八幡（同）あたりの被害が激しい。犀川は水が涸れ徒歩で渡れるほどになり、上流では松本の方へ水が堪っている。遠国からの善光寺参詣者は、皆着物一枚に股引、履物もなく、路銀も一切なく、途方に暮れて帰っていく。

越後は大津波で高田城下あたりまで被害があったと聞く（この風説は3月晦日に虚説とわかる）。

27日、上田城下から善光寺へ参詣に行った者たちを心配して、迎えの人を遣わせたが、多くの人々の安否が確認できない。佐久郡は被害が軽い。松代藩では犀川決壊を警戒して山中へ逃げるように触れている。

善光寺でけがをしたものは、村ごとに網で編んだ駕籠のようなものに乗せて村から村へと協力して継ぎ送っており、今日一日途切れることがなかった。

29日、稲荷山村での死者がおよそ256人、けがをしたものが200人と具体的な数字による報告があった。

4月1日、飯山周辺も被害が大きく、家中の死者60余人、町方200余人と聞く。善光寺の死者はおよそ3,000人と聞く。

4月2日、親子兄弟で善光寺へ参詣し、うち1人だけが助かり、他のものを案じながら逃げ帰る話し。倒れた材に足を挟まれ、^{のこぎり}鋸で切り落として逃げ出した話しなど、悲惨な話しを多く聞くようになる。

4月5日、松代藩の幕府への被害報告による死者数を2万6,123人と記す。

4月20日、稲荷山村の検分による死者数を、旅人も合わせて170余人と訂正される。

この稲垣家の日記からは、次のことが指摘できる。他の多くの記録に見られる善光寺旅籠藤屋の被害が、地震翌日の25日には上田領へ情報として伝わっていたこと。26日以降、被災者が郷里へ逃げ帰る中、災害情報が広まっていること。越後での津波の噂が26日に流れ、30日にうそだとわかる。27日には、善光寺に向けて安否確認の使者が向かい始めていること。善光寺における地震の惨状を伝える話しが、4月2日から流れ始めていること。他藩の災害情報、幕府への被害報告など、公的文書から災害被害の具体的な数字が記録されていることである。

中山道沿いの宿場町、小県郡長久保新町（^{ちょうくぼしんまち}長和町）の『小林家日記』では、26日に焼け切れた蒲団などを着て、縄の帯を結び、また、俵などをまとい、地震の恐怖から逃れるように故郷をめざす被災者の様子が、地震2日後には記されている。

伊那街道の宿駅の一つ、^{かみほ}上穂宿（赤須宿との合宿）が置かれた上穂村（^{こまがね}駒ヶ根市）の『大沼日記』によると^{注3)}、26日、24日の大地震は善光寺が大変な被害だと聞く。27日、夕方より正確な情報を知るようになる、として志ま屋に^{ししゆく}止宿した5人連れの旅人から地震の様子を聞き、書き留めている。伊那郡には26日に善光寺被害の情報が伝えられ、その情報も旅人からのものが最初であったことがわかる。

木曾郡、中山道馬籠宿（^{まごめじゆく}山口村）本陣の^{はちや}蜂谷家に伝わる『大黒屋日記』によると、27日、善光寺本堂は残り、その他の寺や町場は火災で残らず焼け、死者の数はわからない、と旅人からの噂を書き留めている。3月晦日には、善光寺敬寿院（教授院）という坊に泊り被災した尾州一ノ宮の女4人連れが馬籠に着き、その時の様子を詳細に伝えている。馬籠では、地震発生から3日で善光寺の地震情報が届いたのである。

こうした日記類から、災害情報の広がりを図にしたのが表3-2である。地震翌日には上田、2日目には長和町、駒ヶ根、群馬県高崎、新潟県能生、津南町へというように広がり、栃木県日光、静岡県御殿場には発生から6日後の3月30日、三重県桑名には10日後の4月4日、山形県西川町には13日後の4月7日というように広まっていった。

こうした災害情報は、被災者でもある村民や旅人、被害検分に現地に入った藩士、村役人など、様々な人を介して街道上を刻々と伝えられ、広まったことがわかる。特に、善光寺・稲荷山など、被害が大きかった場所の情報、犀川が上流の山崩れでせき止まり、丹波島の渡しが徒歩で渡れることは、多くの記録に共通して見られる。被害が大きいく所情報は早く、集中して伝えられている。

地震発生直後は、虚実入り混じった様々な情報が飛び交ったに違いない。領主は、民衆の不安をおおるこれらの風説を、直ちに取り締まった。須坂藩では地震の2日後、噂を流すことを

禁じた次のような高札を、領内の4か所に設置するように達している^{注4)}。「この度の地震についてどのような風説をも触れ回り、諸人をまどわす噂を流すものは不届きである。そのような者がいた場合には召捕るので報告せよ」。越後高田藩では、「根も葉もない虚説を申し触れる輩は、その基を聞きただしすぐに差し押さえるように」との触書が3月晦日に出されている。

松代藩では3月晦日、東福寺村元吉が犀川の堪水箇所が決壊して「水押し来り候」と触れまわり逮捕され、町宿預けとされた。4月11日には、松代城下で高張をつけ衣類を水に濡らし、「切れた、切れた」と高声で叫び、駆け回った男が召捕られ、大騒ぎとなった。

表3-1 幕府への災害報告一覧

松代藩(真田信濃守)	水内・高井・埴科・更級郡	中之条代官所(川上金吾助)	水内郡
3月26日	松代初度御届	3月25日	中之条初度御届
4月1日	岩倉山抜崩犀川堰留御届	4月10日	中之条御支配并外諸方災害軽重之御届
4月2(3)日	犀川筋并土尻川堰留之模様御届	4月15日	犀川筋水先初度御届
4月12日	領分村々潰家死失御調并拝借金御願	4月	御支配所潰屋敷御届
4月14日	虫倉山抜崩御届	4月	御預所堤溜池損地御届
4月14日	犀川湛水押し切満水御届	4月	潰屋焼失御届
4月18日	8度目御届	4月	御預所御普請所破損御届
5月1日	国役普請御願	4月	中之条支配村々救方之儀取計方伺書
5月1日	鹿谷村分地高地川荒間沢湛留御届	4月	中之条支配所最寄私領諸方風聞御届
6月7日	掘割普請願	4月	中之条犀川溢落候模様并諸方荒地御届
	善光寺地潰焼失取調御届		
		中野代官所(高木清左衛門)	水内・高井郡
飯山藩(本多豊後守)	水内・高井郡	3月25日	中野初度御届
	飯山初度御届	4月	潰御届并拝借金願
4月13日	潰御届		犀川湛水押し切洪水御勘定所元々より御沙汰
		4月16日	犀川出水先初度御届
須坂藩(堀長門守)	高井郡	4月24日	出役先より大洪水ニ付村々危難御届
3月25日	須坂藩初度御届		
4月14日	犀川筋出水先初度御届	善光寺	
		3月27日	青山善光寺へ地震の知らせ
上田藩(松平伊賀守)	小県郡	4月	善光寺潰焼失取調御届
4月1日	上田藩初度御届		
		高田藩(榊原式部大輔)	越後頸城郡
松本藩(松平丹波守)	筑摩・安曇郡	4月4日	高田藩初度
3月27日	松本藩初度御届	4月7日	高田藩2度目御届29日再大地震ニ付
		川浦代官所(小笠原信助)	越後頸城郡
		3月25日	川浦初度御届
		4月	川浦支配所并諸方風聞御届

出典：『新収日本地震資料』より作成

表 3-2 善光寺地震の情報の広がり

経過日数	情報を聞いた日		場 所	現 在 市 町 村
0	3月24日	地震発生	長野市西縁部	長野市
1	3月25日		小県郡上田原町	上田市
2	3月26日		小県郡長久保村	長和町
2	3月26日		伊那郡上穂村	駒ヶ根市
2	3月26日		上野国八幡	群馬県高崎市（カ）
2	3月26日		越後国頸城郡能生	新潟県糸魚川市能生
2	3月26日		越後国魚沼郡寺石村	新潟県津南町
2	3月26日		越後国刈羽郡柏崎陣屋	新潟県柏崎市
3	3月27日		木曽郡馬籠宿	岐阜県中津川市
4	3月28日		佐久郡田野口村	佐久市白田
4	3月28日		上野国新田郡太田町	群馬県太田市
4	3月28日		越後国頸城郡馬屋村	新潟県上越市清里
6	3月30日		武蔵国多摩郡柴崎村	東京都立川市
6	3月30日		越後国頸城郡糸魚川町	新潟県糸魚川市
6	3月30日		下野国都賀郡日光	栃木県日光市
6	3月30日		武蔵国秩父郡三峰神社	埼玉県秩父市大滝
6	3月30日		駿河国駿東郡山之尻村	静岡県御殿場市
7	4月1日		越中国射水郡氷見町	富山県氷見市
7	4月1日		近江国蒲生郡八幡町	滋賀県近江八幡市
8	4月2日		伊勢国飯高郡松坂	三重県松阪市
10	4月4日		伊勢国桑名郡桑名城下	三重県桑名市
13	4月7日		出羽国村山郡大井沢村	山形県西村山郡西川町
23	4月17日		豊前国下毛郡西屋形村	大分県中津市本耶馬溪町

注) 本表は、3月24日の地震発生以降、地震の中心が長野の善光寺周辺だと伝わった日付を、主に日記類から抽出して作成した。地震情報がどのように広がったかがわかる。参考にしたものは『新収日本地震史料』である。

第3節 摺物による災害情報

前節で概観したとおり、江戸時代、為政者（幕府や藩、支配代官など）は地震の災害情報を一般に公表する義務はなかった。そうした中、災害情報を最も速く第三者に向けて発信したのが当時「読売」と呼ばれた摺物である。現代では“かわら版”という言葉も使われている。

かわら版という言葉は、江戸時代の末ごろに登場したもので、これにあたるものはそれ以前から広まっており、街頭で読んで売られたから「読売」、あるいは木板摺りの一枚ものに仕立てられたため「摺物」と呼ばれた。こうした読売は一般に、江戸時代の無届の出版物で、出版する当事者の所在、名前も明かさない匿名情報であった。また、街頭などで有料で販売された。

地震や火事などに関する災害読売の多くは、客観的に正しいかは別として、概して災害発生の事実を伝えようとする傾向が強かった。このため、災害情報を知らせる読売は、公の許可を経ずに出版されることが半ば黙認されていた^{注5)}。こうして多くの読売が、現代に伝えられている。

それでは善光寺地震についての読売は、いつごろから販売されるようになったのだろうか。信濃では先に見た小県郡長久保宿の『小林家日記』に、4月1日夜、善光寺地震の「読売」の者が来たとある。松代藩士鎌原桐山が記した『地震記事』では^{注6)}、27日には江戸にて大略を板行にした「読売」が売られ、その後地震水難の場所を地図に記した図を売るものが何種類もあったとされ、地震後3日目に、江戸で地震の速報的な読売が出回っていたことを記録している。

『むしくら日記』では4月、川中島の塩崎領で地震潰水押などを記した絵画を売るものがあると記されている。江戸では、4月初めに早くも「読売」が売られ、後には錦絵、けん（拳）なども出され大流行した。京、大坂でも4月の初めころから読み売りされたと書かれている。

善光寺大地震の読売は、異版も含めその数は20種類を上回る^{注7)}。中でも、被災地周辺で作られたと思われる読売が販売されているのが大きな特徴である^{注8)}。

そのうち、特徴的なものをいくつか紹介したい。まず、図3-1「かかる目出度き御世に…」ではじまる読売は、3月30日午前10時ごろに売り出され、松代藩士によって購入され、藩に届けられた旨の書き込みがされている^{注9)}。これにより、場所は不明だが販売の日付が推測できる読売としては、最も早いものである。ここでは、善光寺へ通じる北国街道の丹波島、矢代、戸倉、坂木、上田、田中、小諸、沓掛、軽井沢、北国西街道では稲荷山、青柳、会田、刈谷原、岡田、松本、松代街道で松代、川田の宿場など、街道に沿って被害の概要を速報している。死者数、倒壊家屋の数など具体的な被害の数字はまだ書かれていない。

図3-2は、稲荷山の宮大工、小林五藤によって作られた3枚つなぎの読売で『信濃国大地震火災水難地方全図』である^{注10)}。稲荷山宿は家屋倒壊後の火災で、宿場の8割が焼失するという大きな被害にあった場所で、五藤自身も自宅の倒壊で家族4人を失っている。五藤は自ら読売を出版した動機について、「遠方の友人から地震の実説を問うことがしばしばで、いちいち筆にまかせて書いていられないので、その概要を記して出版した」と説明している。このため、

読売ではあるが実名入りの無届出版である。

五藤は弘化4年の秋に上洛し、この読売を予ねて知遇を得ていた正親町三条實愛おおぎまちの一見に供し、計らずも孝明天皇せいめいの勅覧ていらんを賜ったとされる^{注11)}。出版の時期は6月末で、余震が日に5、6度続く中で完成したもので、4月13日の犀川の湛水箇所決壊による洪水後の浸水域を、色刷りで示している。

五藤は、この後にも図3-3『信濃国大地震火災水難地方全図』と、表題は同様で別の読売を出している^{注12)}。図3-2の読売に比べると2枚つなぎとコンパクトだが、被災地域に安曇郡を加えて七郡（水内・高井・更級・埴科・小県・筑摩・安曇）とし、図示する範囲を広げている。さらに、地図上の地名の間違いを訂正し、コンパスを入れるなどして地図を見やすくする改良がなされている。右肩には「死者行方不明者8,400余人。圧死・焼死・溺死や旅人の死者数は不明。斃牛馬750疋余。山崩大小42,456か所。今年善光寺の開帳のため諸国の旅人がことのほか多い」と死者数などでも災害像を示そうとしている。

図には、7月20日（絵図上では7月21日と書かれる）の裾花川決壊の情報が記されていることから、出版はこれ以降ということになる。上梓は茂喬、図畫蘭溪、書記栗軒、彫工泉雀と記され、多色摺りである。これも作者などは記されているが無届出版である。

図3-4は『大地震満水の図』と書かれた読売で、地元で出版されたものと思われる^{注13)}。この読売は、その板木が長野市丹波島の堀家に伝えられている。この板木から摺られた当時の読売も、真田家によって収集され現存する。この読売の特徴は以下の9点である。

- ① 読売の中でも東西南北をあらわした絵図上に、凡例をもって村の被害状況を伝える絵図型の読売である^{注14)}。
- ② 描かれている被害の範囲は水内・高井・更級・埴科・筑摩・安曇・小県の七郡に及ぶ。所領別では松代領、幕府領、上田領、塩崎知行所、松本領、戸隠神領、須坂領、善光寺領、飯山領、椎谷領であり、飯山領、中野陣屋管轄の幕府領の被害は書かれていない。
- ③ 被災地名は街道沿い、犀川・土尻川沿いを中心に、行政村としての村ばかりでなく字や小字を含めた被害状況を記している。
- ④ 「姨捨山」・「八幡宮」・「康楽寺」・「長谷寺」など、災害と直接関係のない名所情報も加えられている。
- ⑤ 郡境の境界線が描かれていない。
- ⑥ 凡例の「水多通ル」などの表現から、4月13日の犀川決壊による洪水被害も加えられ、出版はこれ以降である。
- ⑦ 犀川決壊の出水で塚（山伏塚）が崩れ、中から源海上人の入定坐像（ミイラ）が現われ、上氷鉋村（長野市川中島町）唯念寺で開帳されたことが書かれている。
- ⑧ 板木の裏には、翌年の山城・近江を中心とした大風雨の読売が彫られている。
- ⑨ 彫りが深い。

以上の点から、この読売は災害情報を迅速に伝えることよりは、販売促進効果をねらった様々な要素が加わった読売といえ、読売の中でも後出のものと考えられる。特に特徴的なのは、源海上人のミイラが現われ、唯念寺で開帳されたことが書かれていることである。このことは当時かなり評判になったらしく、『むしくら日記』など複数の資料に見える。

ミイラを開帳した唯念寺^{ゆいねんじ}にも、この開帳のことを記した地震読売が伝えられていた。この読売の板木は3枚1組であったが、残念ながら現在は所在不明である。しかし、この板木から摺られた読売は現存する^{注15)}。これは、先に見た図3-2の小林五藤の販売した『信濃国大地震火災水難地方全図』の異版で、絵図右上、地震の概略を記した最後の「稻荷山村 宮匠」の部分を「源海法印入定の坐像が出現した。川中島上氷鉋邑一重山唯念寺」と板木に埋め木して訂正して摺られている。

被災地周辺で作られたと思われる読売は、まず災害の速報性を重視した文字や簡単な絵、あるいは図入りのものが最初に作られた。どこで、何が起こったのかという情報が最大の価値を持って、宿場などで読み売りされた。その後、稻荷山の小林五藤のように、地図上に凡例をもってその被害状況を記した絵図型の読売がつくられた。絵図型の読売は、現在7種類確認されている(表3-3)。

こうした絵図型読売の情報価値は、一つは被災地の親類・縁者への安否確認の問い合わせに答えるための地震の概要報告にあった。絵図型読売は、信州の地理に不案内な人々に、被害の状況を一目で、しかも凡例の記号から、ある程度客観的に被害状況を知らせることができ、重宝された。

2つ目は、被災した親類縁者を尋ねて、かの地を訪れる人々の道案内をこれらの絵図が果たした。新発田藩士と思われる黒川順太郎らは、信州検分の御用に先立ち、名主善之助に不案内な土地なので、地名の記した絵図(国絵図)の借用を依頼している。善光寺町やその周辺には、地震後も被災した家族や親類・縁者の安否確認、亡くなった人の遺骸を引き取りに全国各地から多くの人々が訪れた。また、被災者を出した村や藩でも、検死や安否の確認のために役人を派遣した。土地感のない遠方の人々は、こうした絵図型の読売から広域な災害情報と、自らの道中情報の2つを読み取りながら被災地を尋ね、情報としての絵図型読売を郷里に持ち帰ったと考えられる。

稻荷山の小林五藤が最初につくった図3-2の読売は、こうした遠方からの災害状況の問い合わせに大いに利用され、販売から約1か月後には、改訂版を発行するほど人気があったのである。改定した図3-3の読売では、絵図の精度を高め、安曇郡を加えた信濃七郡を網羅し、より広域な災害情報が盛り込まれた。これも人々が、地図の役割も併せ持つ災害情報を求めていたことを示している。

絵図型読売は広範囲な被災情報を収集し、地図へプロットし、色刷りして仕上げるなど、文字や挿絵を添えただけの読売より手間と時間がかかった。そのため、同じ読売でも発行は遅れ、地震の速報性といった商品価値ではなく、別の価値を持った読売として売り出された。そこには広範な災害情報を絵図上で確認でき、記号化された被害状況からは被害の有無などを客観的

に認識することができた。

こうした情報が街道、宿場で作られ、販売された点は重要である。図3-4の読売の板木を伝える丹波島宿や、図3-2、3-3の稲荷山宿の小林五藤のように読売を作ることが可能な場所は、広範囲な情報収集が可能であり、彫り・摺りなど出版を支える職人が確保できた宿場であった。また、被害の大きかった稲荷山や、善光寺に近い丹波島などには、こうした情報を買求める不特定多数の買い手・読み手が集まり、人々も積極的に宿場での情報収集を行ったのである。



図3-1 「かかると目出度き御代に」(真田宝物館所蔵)



図3-2 「信濃国大地震火災水難地方全図」(長野市立博物館所蔵)

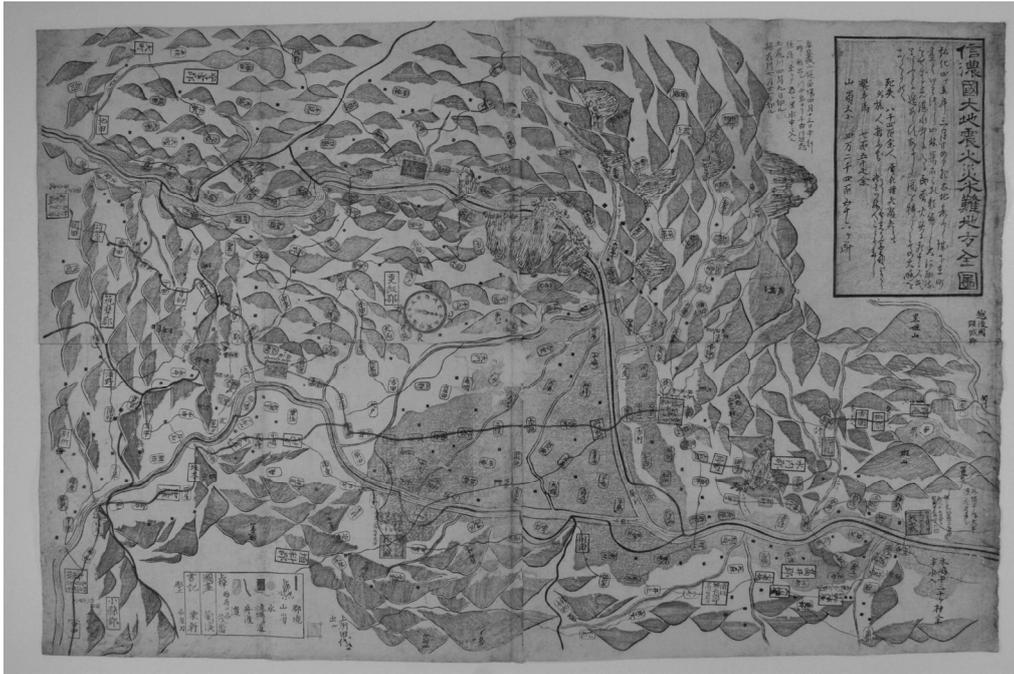


图 3-3 「信濃国大地震火災水難地方全図」(長野市立博物館所蔵)

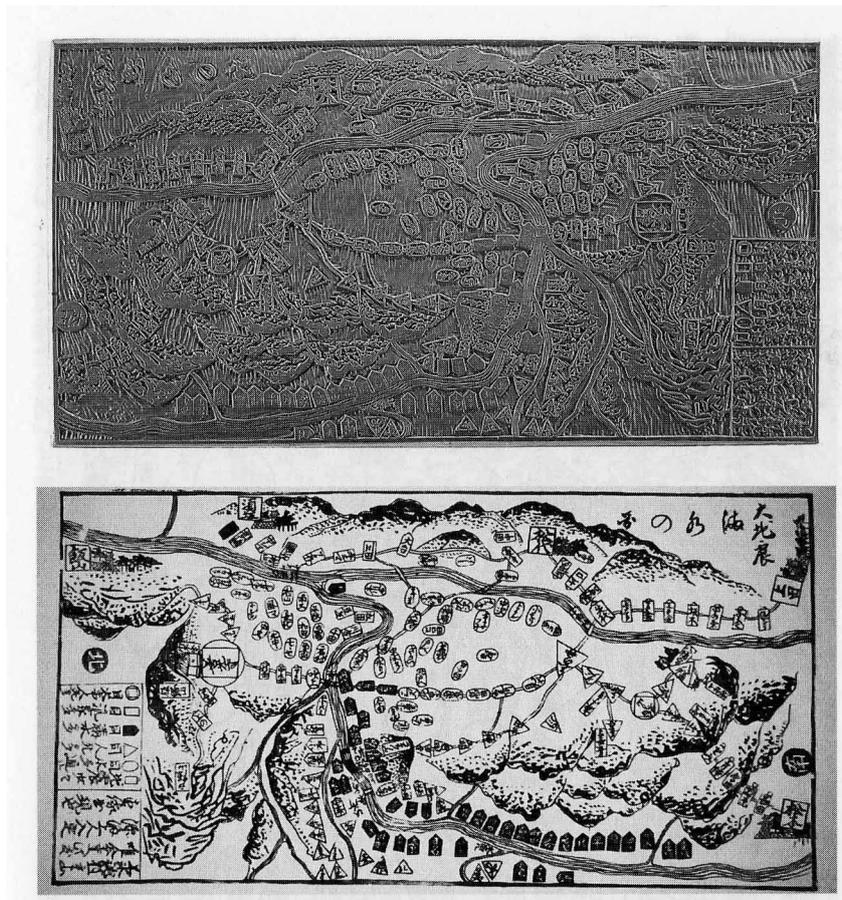


图 3-4 「大地震満水之図」 板木(上)と摺物(下)(長野県長野市堀清巳氏所蔵)

表3-3 信濃国内で出版されたとされる絵図型読売一覧

名称	信濃国大地震火災水難地方全図	信濃国大地震火災水難地方全図	信濃国大地震火災水難地方全図
大きさ(横×縦/cm)	85.8×41.4	88.5×41.0	62.2×41.4
紙サイズ	3枚 (1紙29.3、2紙27.4、第3紙30.2)	3枚 (1紙31.4、2紙27.9、第3紙30.7)	2枚 (1紙30.8、第2紙31.4)
摺	色摺	色摺	色摺
凡例	此角印駅 水入水押之村々 潰家村々 郡分 此印類焼 此色水 此色道 無難之村々(但一分三分之潰家何レモ有之)	此角印駅 水入水押之村々 潰家村々 郡分 此印類焼 此色水 此色道 無難之村々(但一分三分之潰家何レモ有之)	郡境 山崩 水 焼場并道 舟渡 潰
版元など	稲荷山住宮匠	川中島上氷鮑邑一重山唯念寺	上梓稲荷山茂番 画工蘭溪 書記栗軒 彫工泉 刀
発行(推定を含む)	6月末		7月21日以降
所蔵者	長野市立博物館	長野市立博物館	長野市立博物館

名称	信濃国善光寺大地震絵図	信州水内郡川中島大地震洪水之図	信濃国六郡大地震満水之図
大きさ(横×縦/cm)	91.3×41.2	61.7×43.6	59.2×39.4
紙サイズ	3枚 (1紙32.0、2紙28.0、3紙32.8)	2枚 (1紙31.2、2紙30.5)	1枚
摺	色摺	色摺	墨摺
凡例	潰家 無難 郡分 焼失	宿 村 郡境 神社 道路 山崩 水内郡 高井郡 埴科郡 更級郡 水色川筋漂蕩/但以此色ノ厚薄洪水之甲乙ヲ知	此印駅 地震潰多 同焼失 同少々 同満水家流 同5分7分流 同水押
版元など	信陽有明里宝泉堂	禁売買	犀川亭山一三九 相改再板画工溪山写
発行(推定を含む)		7月以降	7月20日以降
所蔵者	三井文庫	長野市立博物館	国文学研究資料館

名称	大地震満水之図
大きさ(横×縦/cm)	49.7×30.8
紙サイズ	1枚
摺	墨摺
凡例	地震少々 同水押通ル 同人死多 同満水多 同流家多 同火事人死多 上氷鮑村唯念寺一重山唯念寺へ此度源海上人入定坐像出現也
版元など	
発行(推定を含む)	
所蔵者	国文学研究資料館

第4節 善光寺界限を詳述した新出の読売

この地震で最も被害の大きかった善光寺には、自然と人々の目が注がれた。今回の調査で新しく、善光寺周辺の被害を摺った楮紙3枚継ぎの大型の読売が見つかった(図3-5)。大きさは縦58.2×横189.8cmの合羽刷り。『信濃国善光寺御開帳地震潰焼見取絵図』と題されたもので、池田町上原家に伝わるものである^{注16)}。上原家は先の第2章第3節で述べたとおり、池田組のおおじょうや大庄屋を勤め、『弘化4年善光寺地震池田組大絵図』など、善光寺地震に関する史資料も多く所蔵しておられる。

読売は横長の画面の右端に、善光寺本尊が約1か月避難した仮堂を描き、画面左(南)に向かって奇跡的に倒壊、焼失を免れた年神堂、善光寺本堂、経蔵、三門へと描く。焼けなかったこれらの建物は、摺り終わって3枚に継がれてから茶色に着色されている。その他焼けた境内の建物は赤く摺られて、火災の被害が一目で見取れる。

絵図では本堂へと向う北国街道の北八幡川あたりを境に、そこから右側(北)を焼失した赤で摺り、左側(南)は墨色で街道に沿って家並みを描く。一番左(南)は犀川のもと、北国街道の吹上(長野市荒木)である。吹上、市村、千田には4月13日の犀川堤水決壊後の浸水ラインを摺り分けている。

善光寺本堂の周りに刷られた文字は、表題の「信濃国善光寺御開帳地震潰焼見取絵図」を右隅、善光寺の四門、本堂などの建物の大きさ、開山縁起を短く書く。善光寺の被害は、妻戸衆を赤、中衆を▲で色分けし、院・坊の被害を書き分け、山内壓死人住僧8人、市中壓死20人、諸国旅人焼死人数知レズ、と摺る。

また、松代領損高3万2,850石とし、田方1万85石、畑方2万2,720石余り、家潰7,670軒、600軒水浮土、300軒土中埋、死人2,770人、牛馬267匹と具体的に被害を彫っている。この数値と、松代藩が幕府へ報告した被害数値と比較すると、数字は4月中旬以降の松代藩の情報をもとに書かれたものと思われる。

この読売の最大の特徴は、摺られた絵図に後からハンで押しただしい人影である。善光寺へ向う街道筋と善光寺境内にあふれんばかりの人波を、3人一組のハンを3種類くらい作り、それを摺り上った紙に押しつけて読売を完成させている。善光寺境内だけでも約530人もの人影が押しつけており、見るものを圧倒する。

また、犀川浸水域には家型のハンが押しつけている。この家型のハンは松本領池田組の地震被害を示した『弘化4年善光寺地震池田組大絵図』の家潰れ記号の型と全く同じもので、池田組独特の被害表現方法である。この池田組のハンによる表現方法は、短時間で摺り、売り抜けるという従前の読売と異なり、時の災害情報に応じて商品(読売)を仕上げ、販売できるメリットがあった。ハンを押しつけることは手間であったが、板木を彫り直すことに比べれば安価で迅速なのではなかったかと思われる。

摺った後の著色、ハンを押す作業から考えると、発行部数は少なく、管見では上原氏が所蔵するこれのみが知られる。『弘化4年善光寺地震池田組大絵図』が6月29日に松本藩に提出されていることから、この読売もほぼ同じころに作られたと思われる。

池田組では善光寺に詣で、あるいは出稼ぎに出ていて善光寺で亡くなった人が9人、隣接する大町組では40人ほどとされ、善光寺周辺の被害に強い関心が持たれていた。このように地元で作られた読売には、ある程度の地域内で流通し、手の込んだ読売も販売されていたのである。

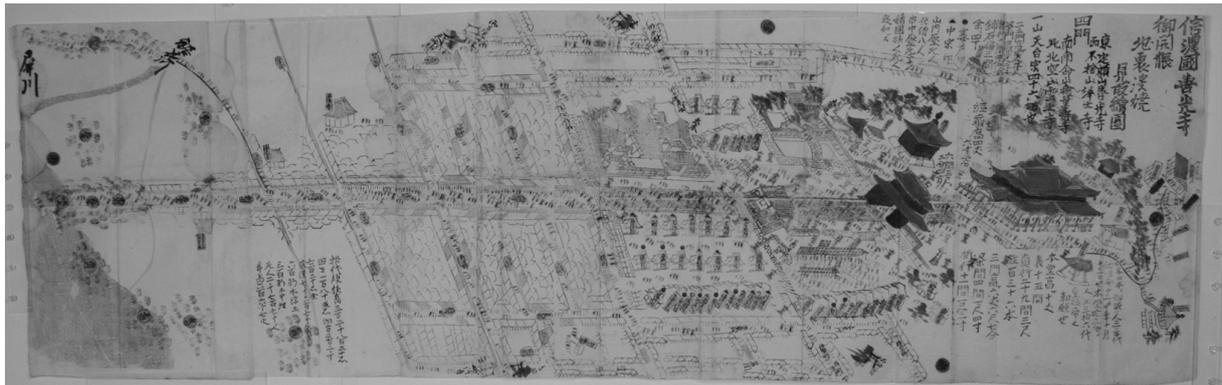


図3-5 「信濃国善光寺御開帳地震潰焼見取絵図」(長野県池田町上原卓郎氏所蔵)

第5節 原昌言の災害絵図

次に大量に販売された善光寺地震の災害絵図としては、同類中最も詳細な内容を持つ『信州大地震山類川塞湛水之図』（以下『湛水之図』とする。図3-6）、『信州犀川崩激六郡漂蕩之図』（以下『漂蕩之図』とする。図3-7）について考える^{注17}。この災害絵図と、先に見た読売との大きな違いは、この絵図が無届出版ではなく、幕府の正式な許可を受けて出版された絵図だということである。

当時の出版物の許可について簡単に振り返ると、水野忠邦による天保改革の下、株仲間が解散させられ、これまでの本屋仲間の統制に替わって、幕府学問所に草稿を提出して検閲を受けることになった。学問所で出版許可を受けた草稿は「学問所改」の印が押され返却された^{注18}。この絵図の作者、原昌言はこの手続きを踏んでこの2枚一組の絵図を出版したのである。

原昌言の末裔にあたる原家には、この経緯を裏付ける文書が伝えられている^{注19}。それによると、昌言は3月24日の地震の後、水内郡新町村（信州新町）の親類へ安否うかがいに出かけ、岩倉山（虚空蔵山）の崩落による犀川湛水の現状などを見聞し絵図にした。次いで4月半ばに高井・埴科郡辺の蚕飼場養方の見回りに出かけ、折りから犀川湛水箇所が決壊と水害の状況を妻女山の山頂で実見し、水災の図を加えた。7月中、農間のため南関東筋の蚕種場へ出府し、その際、昌平橋内紅梅坂に住む栗原孫之丞の屋敷に出かけ、絵図面を御覧に入れたところ、熟覧したいとされ差し上げて帰宅した。その後、栗原から学問所への出版の事を推挙され、伺い書を提出し、8月21日に蔵板並びに開刻の許可を得、御附紙と改印を頂戴した。そこで、上田藩へも一部献納することを約束し、開刻を認めてもらいたいと願書を提出している。上田役所へのこの願いでは弘化4年9月とある。差出は塩尻組上塩尻村伝兵衛倅、良平とある。良平は昌言の通称である。

この災害絵図を作った昌言は、小県郡上塩尻村（上田市）の出身で、原家は上塩尻村の庄屋を務める家柄で、昌言も安政元（1854）年に庄屋となり、明治4（1781）年塩尻村戸長となった人物である^{注20}。弘化4年は、28歳ということになる。

この絵図出版で幕府学問所との橋渡しをした栗原孫之丞とは、栗原信充である。栗原（1794～1870年）は江戸後期の故実家で、平田篤胤から国学を学び、その後自宅で故実の教授にあたった人物である。原昌言と栗原信充との接点は、国学であった。昌言は幼きより国史、国学を究め、敬神の念篤く、博学多才にして学識高き人物とされている。

この両者を結びつけた人物は、上田城下原町の呉服問屋、成沢寛経である。成沢も国学を学び、平田の門下生であった。成沢と昌言は、昌言のこの災害絵図出版後、協力して『大塔物語』という室町時代の軍記書を、幕府学問所の許可を得て出版している^{注21}。

昌言と昌平坂学問所とのつながりは、次の資料からもうかがえる。善光寺宿本陣藤屋平内の筆写した「従諸家様 公儀御届書写」には、次のような書き込みがある^{注22}。上田藩塩尻村原某が江戸聖堂において写し取ったものを、原氏より借りて写し所蔵する。つまり、藤屋平内が写

した諸家から幕府への地震被害の報告書は、昌言が昌平坂学問所から写してきたものを借りて写したというのである。昌言は栗原や学問所から直接情報を得て、自らの絵図作成に役立てていたのである。

以上のことを加味して、改めて出版された絵図の内容を見ると、昌言は『湛水之図』で、『三代実録』巻50、『扶桑略記』22にある仁和3（887）年（善光寺地震から961年前にあたる）7月晦日の湛水・溢流は、地名の記載はないが、犀川か千曲川ではないかと考え、今回同様の災害が起こったとして、この災害記録を後世に残したいと災害地を数度にわたって調査し、この絵図を書いたと前書きされている。『三代実録』・『扶桑略記』・『古事記』や穂高、戸隠神社の祭神が記されている点は、昌言の国学的な素養に基づくものである。

『漂漂之図』では、24日の地震発生から、岩倉山崩落、犀川湛水、3月28日の裾花川決壊、4月13日の犀川決壊、以下地震の具体的な進行が時系列に説明されている。最後は10月末日の余震被害まで書かれている。この時間を追って詳細に刻まれた災害情報は、先の幕府への被害報告からの引用であろう。

この災害絵図出版に関しては、上塩尻村の蚕種^{きんたね}の製造と販売が大きくかかわっていた。昌言が災害絵図を認めるきっかけとなった水内・更級・埴科への出入、あるいは江戸へ出府の理由は、先の文書にあるとおり、養蚕・蚕種業であった。上塩尻村の蚕種製造は、天保期（1830～43年）には、それ以前の本場、奥州産を凌駕する状況にあった。上塩尻の蚕種製造家は蚕種販売と国学をもって横につながり、蚕種販売という農間稼^{のうまかせ}ぎでは、江戸をはじめ広い地域を商圈としていたのである。

さらに、上塩尻村の蚕種製造家は、養蚕技術書の出版も以前から行っていた^{注24}。昌言の出版した災害絵図には、江戸の山城屋と相版として地元信州の善光寺大門町蔦屋伴五郎、上田海野町上野屋三郎助の名がある。地方書肆^{しよしよ}の成長と、養蚕技術書の出版が行えるほど、上塩尻村は文化的にも経済的にも豊かであったといえよう。同村の立地を改めて確認すると、村は北国街道沿いに位置し、西は下塩尻を挟んで松代領鼠宿^{ねずみしゆく}と接し、東は2か村を経て上田城下へと通じていた。先の読売販売が宿場で行われたように、昌言の災害絵図もやはり宿場に隣接する環境から発信されていたのである。



图 3-6 「信州大地震山瀬川塞湛水之図」(長野市立博物館所蔵)

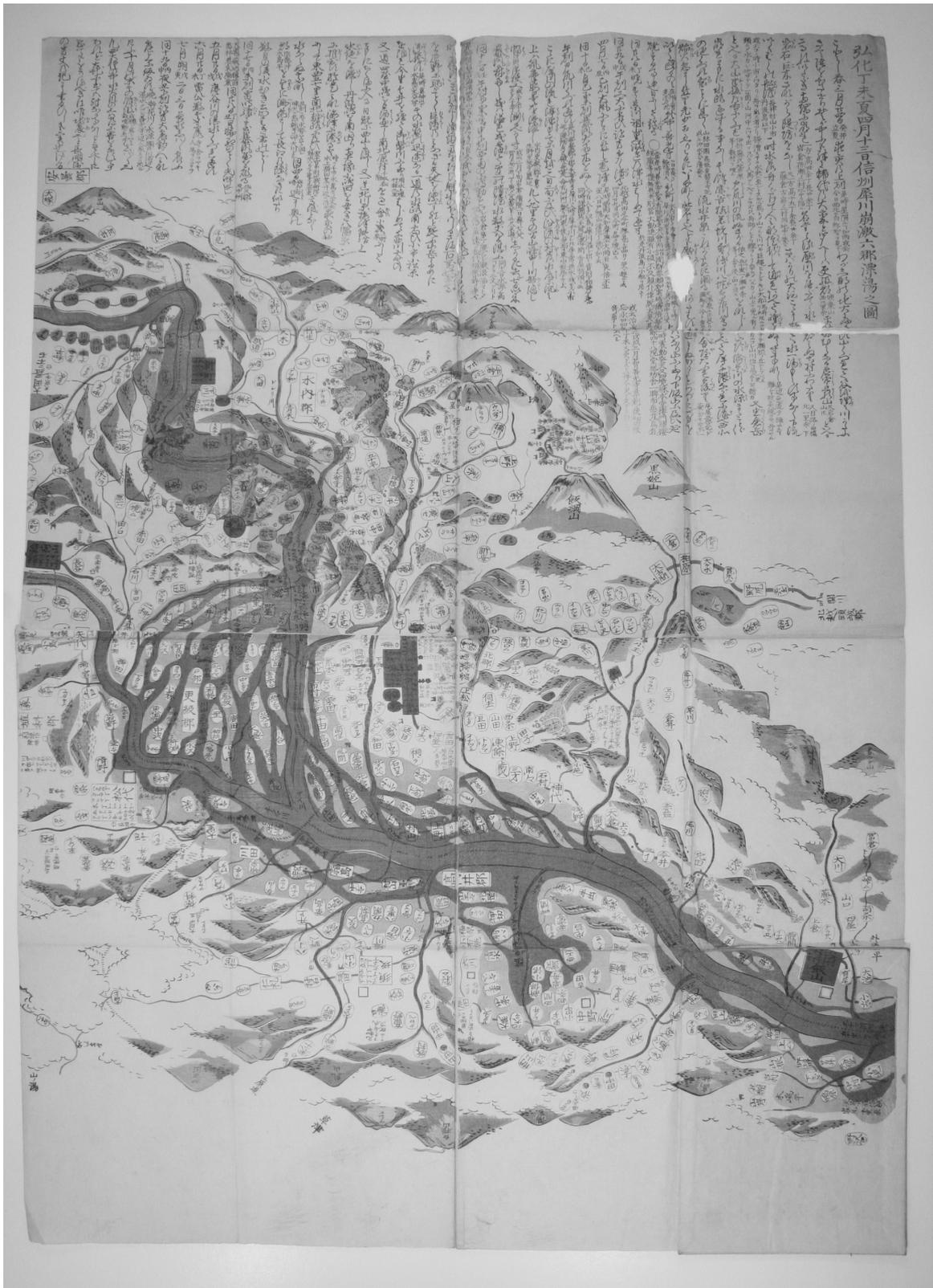


图 3-7 「信州犀川崩激六郡漂蕩之図」(長野市立博物館所蔵)

第6節 様々な災害情報

善光寺地震の災害情報の特徴は、先に見た読売や災害絵図などのほかにも、これ以降の災害で見られたり、語られたりするあらゆるメディアが一斉にあらわれるという特徴がある。次にそれらのいくつかを見ていきたい。

「地震口説き」はその一例である。口説きは物語的な内容を持ち、七・七調か、七・五調の連続で語られる叙事的な民謡である。地震口説きは、文政11（1828）年11月に起こった越後地震のときに、越後の瞽女口説きを真似て発行されたものである^{注25}。善光寺地震では、開帳中の善光寺本堂は被害に合わず、死を免れることができたのは阿弥陀如来の加護であることと、対照的に多くの残酷な死に様が、口説き節の格好の題材となって多くのバリエーションを生み、様々に語られた。

この中にも、地元で作られたものと、江戸などで作られたものがある。こうした出版は先の読売同様、無届出版である故、その内容の信ぴょう性はともかく、売れるものを売れる時期に次々と作り消費されていった。例えば、斎藤真幸（1795～1859年）著の『地震之身之上（瞽女口説）』は次のような謡である。

天地開けて不思議とへば、近江水うみ、するがの富士は、たつた一夜に出来たといふが、それは見もせぬむかしの事よ、爰に不思議は越後の地震、いふも語るも身の毛がよだつ、頃は文政十一年の、時は霜月なかばの二日、朝の五ツと思ひし頃に、どんとゆり来る地震のさわぎ、（後略）

これを善光寺地震と置き換えて出版されたものが、江戸神田八丁堀松坂屋吉蔵の「信州越後地震くどきやんれ節」である。以下に比較してみよう。

天地サエ、ひらけてふしぎといふは、近江水うみ、駿河の富士ハ、わづか一夜ニ出来たといふが、夫はさて置昔のことよ、今度ふしぎハ信濃の地震、花の三月下旬の頃よ、廿四日の夜の五ツ頃、扱もあわれや地震の処、（後略）

と、先の『地震身之上』を写したことがわかる。

榎澤龍吉氏は、著書『叙事民謡善光寺大地震』に13編の地震口説節を収録している^{注26}。そのうち「瞽女口説地震身の上」、「新板大水やむれ節」、「地震火事満水たんとゝ節」の3編は、被害の実相をよく見た上での歌詞、また板木が地元に残るなどの点から信州版であるとしている。この3点以外は江戸版とし、これらは現実の惨状を目のあたりにしなくても、被災地から遠く離れた江戸で口説節にまとめ上げることができたとする。

この地震では江戸や京、大坂では錦絵、ケン（拳）も出回ったとある。例えば、**図3-8**の「さてはしんしうぜん光寺」もそのうちの1枚である^{注27}。この絵の作者は歌川国輝であり、江戸で板行されたものといわれている。絵は、善光寺の阿弥陀如来・女郎・鯰が拳を打つ仕草を

描いている。画面上段の囲み記事の内容は、^{けんうた}拳唄をもじってつくられたものである。絵には、阿弥陀に地震(鯨)がしかられたと書かれている。内容はほぼ同じで、鯨の絵柄が異なるものも刷られており、阿弥陀・女郎と鯨の組み合わせは大いに都市の人々に受け入れられ、版を重ねたことがわかる。善光寺地震から8年後の安政の大地震では、この鯨をモチーフにした「鯨絵」とよばれる錦絵が再び大ヒットとなった。この鯨をモチーフにした鯨絵は、善光寺地震が最初といわれている^{注28)}。

このほかに、狂歌、なぞかけの類も多くつくられた。^{かまはらどうざん}鎌原桐山の『地震記事』は「なぞ、狂歌、発句、信濃(地震)八景などいろゝあり」とこの類いの情報が広まったことを記している。そうした情報の例を次に掲げる。

狂歌

「善光寺しなのでなくて死のうとはゑん
んぶだごんの一言もなし。「はるはるの道を詣でし善光寺、地震にあふてとんだけちゑん」。^{くたびれ}「草臥ぞん、^{ろぎん}路銀がそん、命が大そん」。

百人一首

「嘆くとも帰らぬものとおもへども、かこち顔なる我なみだかな。「地して跡は野原と成にけり、たゝ有明の月ぞ残れり」。「開帳でしぬも前世の約束と、人をも身をも恨みざらまし」。「苗代も震崩したる埋れ田に、哀れことしの秋もいぬめり」(『巷街口説』より)
なぞ

「山中の水溜りとかけて、臨月の女と解く。心は今にもぬける」。「此度の地震とかけて狐付ととく、心は幾度も飛出す」、「善光寺の焼跡とかけてふれ風ととく、心は骨ばかり残る」。

^{ごえいか}御詠歌

「鹿島から使善光寺ハゆひものを地震ニこられ如来迷惑」。「姨捨の名所と聞きし信濃路に、叔父を捨てたハこんどはじめて」

近江八景をもじった信濃地震八景、大水八景も見られる。

「三井・善光寺晩焼、堅田・畠田の落減、石山・飯山運の月、粟津・^{かいづ}海津驚乱、カラ崎・川中嶋涙雨、セタ・弥陀殺生、比良・修羅口説、矢橋・^{やしろ}矢代危難」。大水八景「泥田の動しよふ、無良の亡説、哀れの水乱、飯山の水つき、塩崎寄る海士、川田の落顔、水内の繁昌、八幡の帰飯」。



図3-8 「さては信州ぜんこうじ」錦絵
(長野市立博物館所蔵)

一口咄し^{はなし}

「本多てふらふらするハ娘か本田^{ほんだ}か是ハマよひの前た善光寺は今度の大事で金も銭も皆焼けたろう、デモさいせん程ハ有ナゼさんもんハ残した」。善光寺如来に問い奉る「後の世を願ふ心の人々も、かく早くとは思はざらまし」。如来御答「後世のみか現世も施主に世話かけて土葬、水葬、火葬までして」。

図3-9^{注29)}は地震^{ざいぶみ}の戯文で、地震に関することを調子の良い節にまとめ簡単な絵を添えたものである。右上は「いつそあんじられるよ古里の親は」。右下には「あれさはいたよつなミの親ふね」、左下最後は「はやくしておくれよ地しんのはなし」で終わっている。

こうした戯文の摺物（情報）は、主に江戸などの都市で売られた。都市は被害にあわず、一方でその被害には大きな関心が持たれ、情報が価値を持ち、売るもの、買うものがいた。そのため、売る側は、短い命の情報に様々な付加価値を付けて販売した。先に見た読売や災害絵図に、地震の被害と直接関係のない名所旧跡の情報が載せられたり、ミイラ出現^{たん}譚などの奇談が載せられるのと同様であった。

こうして様々な形で発信された災害情報は、被害の客観的情報だけがすべてに優先したのではないことを示し、図3-9の戯文の最後のフレーズにあるとおり、情報が情報を生み、刺激を求め続けて一種の興奮状態にあったことを示している。



図3-9 「地震の戯文」（東京大学大学院情報学環所蔵）

第7節 災害を伝承する人々—絵馬・石造物—

自然災害の記録は、言い伝えや記念碑、文字や絵、摺物、建造物など様々な方法で各地に伝えられている。それらは地域や時代や立場も超えて、人々に共通する悲惨な災害を繰り返させまいとする切実な願いを形に示したものともいえる。

地震後に奉納された絵馬も、災害情報を後世に伝える役割を果たした。上田市別所北向観音堂の向かって右手には、善光寺地震の災難を辛くも免れた男の奉納した絵馬が掛けられている(図3-10)^{注30)}。絵馬の右上には善光寺の本堂が描かれ、中央には燃え上がる火の手、右下には地震で崩れた梁の下敷きになって苦しみ、助けを呼ぶ人々が描かれている。そこから笠を持つ一人の男が、北向き観音の阿弥陀如来の御光に導かれ助かっている様子が描かれている。

絵馬に記された奉納のいわれによると、この助かった人物は市之助。尾張国知多郡新田の同行の者15人と善光寺参詣にやってきた。道中の夢枕に日ごろ尊信していた北向観世音があらわれたため、市之助は一人上田宿で一行と別れ、北向観音に参詣し、厄除の御守札を購入した。その後稲荷山宿で再び一行と落ち合い、揃って善光寺に参詣し、ふじ屋に一泊した。その夜、5ツ半時に大地震にあった。同行同宿の者が残らず災難にあい行方不明となったが、市之助一人はかすり疵一つ受けずに逃れ出ることができた。市之助がふと懐中を探ると北向厄除の御守札が2つに裂きちぎれていた。これは正に観音様が身代わりになってお守り下されたに違いないと、随喜渴仰のあまり、御礼参りとともにこの額面を奉納した、というものである。

奉納年月日は、地震翌日の弘化4年3月25日となっている。おそらく翌日に北向観音にお礼参りをして帰国し、その後絵馬を携えて再び参詣したのではないだろうか。

長野市安茂里正覚院に伝わる肉筆の2幅対の絵は、地震による善光寺周辺の生々しい惨状とそれに救いの手を差し伸べる阿弥陀如来、地藏菩薩を描いている(図3-11)^{注31)}。1幅目は、3月24日の地震直後の善光寺界隈の家屋の倒壊による部材に押し潰されて苦しむ人々と、火災により逃げ場を失い、建物2階格子から救いを求める旅人の姿が描かれている。絵図の上段からは大本願と思われる建物から阿弥陀如来が来迎し、人々に救いの手を差し伸べようとする様を描く。2幅目は、4月13日の犀川せき止め箇所が決壊後の濁流に飲まれる水難者に対し、善光寺本堂から地藏菩薩が救済の手を差し伸べようとしている構図である。多分に善光寺のありがたき功德を解くための霊験譚的内容であるが、火難、水難にあう人々の表情には鬼気迫るものがある。自身が受けた体験が悲惨なほど、そこからの生還は神仏の加護によると思うのは先の北向観音の絵馬と同様である。

その一方で、災害を種にした戯文や狂歌、なぞかけは、どこか他人ごとであり、興味本位であった。しかし、それもまた地震の記憶の一つであり、悲惨な体験から自己を開放しようとする心の働きでもあった。

地震は人智をこえた強烈なできごとであったから、人々はこれを記録、記憶にとどめ、永く伝えようとしたのは自然なことであった。また、死者の霊を慰めることも、生き残った者のつ

とめでもあった。地震後の追善供養の記録で早いものは、権堂村の永井善左衛門幸一が、地震後7日目の4月1日に権堂村郊外で普濟寺らの僧侶を招き、盛大な法要を行っているものである。松代藩では地震後約1か月後の4月28日、変死亡霊冥福のため妻女山において施餓鬼せよと長国寺へ命じている。参列者は武士、町方、在方から2～3,000人も集まったとされる。このような施餓鬼供養は須坂、飯山両藩でも行われている。

こうした追善供養が契機となり、善光寺地震関係の供養碑などの石造物が各地で造立された。長野市周辺で石造文化財の報告書が刊行されているものから、善光寺地震に関する石造物を一覧にしたのが表3-4である。総数は76基。これは弘化4年3月24日という年号をもとに拾ったため、地震直後の関係した石造物を落としている可能性があることをお断りしておく。総数の半分強、54%を馬頭観音が占める結果となった(図3-14)。7基、9%である追善供養塔には、為政者の建てたものから近親者の死を弔うものまで様々であった。追善供養塔として群を抜いて大きなものは、基壇も含めて約6m余りある「地震横死塚」と呼ばれる善光寺境内の宝篋印塔である(第2章第1節参照)。発願者は上田海野町の商人土屋仁輔で、地震犠牲者で旅人などの無縁者を葬ったもので、災害当初は毎日念仏などの仏事が営まれていたようである。

飯山藩では地震後の一周忌にあたる嘉永元(1848)年3月25日に、高さ3m余りの「黄金石地藏尊」を大聖寺に建立し、現在も供養を続けている(第2章第5節コラム参照)。

松代藩では3回忌にあたる嘉永2年3月に妻女山に「罹災横死供養塔」を造立した。銘文には後世の人々にこの災害を伝え、衆生一切の成仏のためという造立の目的が記され、圧死・焚死男女とも2,764人、犀川下流氾濫溺死46人と刻まれている。

仁政を感謝し顕彰して生き神として祀られる人々もいた。長沼上町、栗田町、六地藏町、内町、津野村の各村では、中之条代官の川上金吾助をまつる「御代官川上様小社」の石祠を造立している。真光寺村では嘉永元(1848)年4月、中野代官の高木清左衛門を「高木大明神」として祀った。

馬頭観世音に続いて総数14基、19%を占めるのが鹿島大明神である(写真3-1)。鹿島大明神あるいは鹿島社の分布には偏りがある。14基中6基が鬼無里地区、年代は弘化地震と断定できないが鬼無里と裾花川を挟む位置にある小川地区(小川町)に3基、旧更埴市域(現在は千曲市)に3基である(図3-12)。鬼無里村では潰れて焼失した家7軒、潰れた家26軒、半潰れなど住めなくなった家57軒、数日水に浸った家9軒、計99軒の被害があったと松代藩の報告にある。小川村の瀬戸川、曲尾については、全壊78軒と、滑りやすい地盤に加えて急傾斜地が被害を大きくした。栗佐(松代領)、寂時(幕府領)は、比較的被害が少なかったとされている。

なぜ鬼無里方面に鹿島明神が集中して祀られたかは、これまで言及はない。大町市の鹿島川上流、江戸時代の借馬村の枝郷に鹿島集落がある。この鹿島集落の氏神である鹿島神社は、常陸国鹿島神宮(茨城県鹿島市)より勧請してきたとされる。1904(明治37)年3月に発行された『新撰仁科記「天災地変史」』によると^{注32)}、天文3(1534)年の地震により、鶴ヶ岳の一部が崩落し、駒沢川の上流をせき止め、その後数十日で決壊し、野口、借馬、大町の各村に大きな被害を与えた。そこで、常陸国の鹿島明神を勧請し、祠宇を建て、要石を埋め、7個の鳥

居を建てて鎮圧を祈ったという。この時、鶴ヶ岳を改めて鹿島大岳とし、駒沢村の牧場を鹿島というようになったと記されている。地震と鹿島神宮、さらに大町の鹿島集落がストレートで結びつくかは即断できないが、地震と常陸・鹿島社を結びつける認識が、信州にもあったことがうかがえる。鹿島明神の集中する地域が、鹿島槍ヶ岳を正面に仰ぐ鬼無里、小川地域ということからも、この伝承には意を払う必要がある。善光寺地震の時には、古くからの地震—鹿島明神—鯰—要石といった図式の中で、一種の流行神^{はやりがみ}となった造立活動と推定するにとどめておく。



図3-10 「上田市別所北向観音堂絵馬」(北向観音堂所蔵)



図3-11 「善光寺地震肉筆被災図」(正覚院所蔵)



写真3-1 鹿島大明神
(鬼無里十二平地区) (降幡浩樹撮影)



図3-12 鬼無里地区を中心とした鹿島社分布図 (長野市立博物館作成)

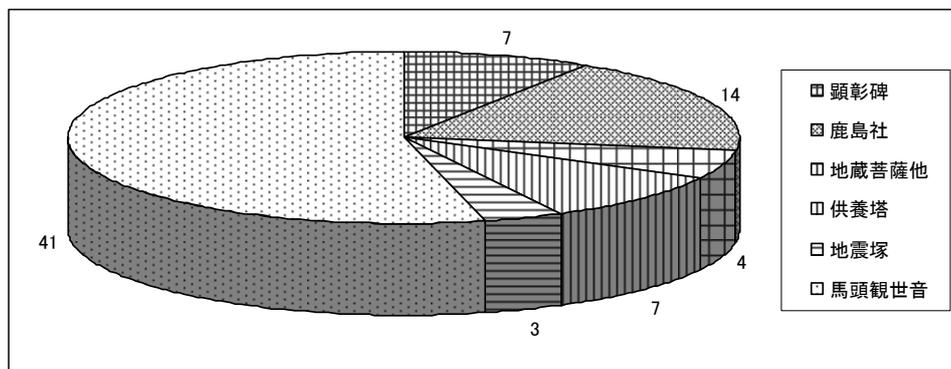
表3-4 善光寺地震に係わる石造文化財一覧

旧市町村	地 区	石造物種類	年 号	記銘文・特徴
長野市	境内	法篋印塔	弘化4歳次丁未3・24	地震横死冢
長野市	芹田	供養塔		善光寺大地震死没先代諸霊之墓
長野市	浅川	石祠	嘉永元申戊4月吉日	高木大明神 伺去真光寺村百姓中
長野市	上松	地藏菩薩		浅河原地蔵
長野市	安茂里	馬頭観音	弘化4丁未3・24	
長野市	安茂里	馬頭観音	弘化4未3・24	馬頭観世音
長野市	安茂里	馬頭観音	弘化4未3・24	
長野市	安茂里	馬頭観音	弘化4未3・24	
長野市	安茂里	馬頭観音	弘化4未3・24	
長野市	長沼	石祠	弘化4□□10・18	御代官川上様小社
長野市	長沼	石祠	弘化4未	御代官川上様小社
長野市	長沼	石祠	弘化4未	御代官川上様小社
長野市	長沼	伊勢社(石祠)	弘化4未	代官 川上様小社 長沼六地藏町
長野市	長沼	石祠	弘化4未	御代官川上様小社
長野市	七二会	馬頭観音	弘化4未3・24	小池善左エ門
長野市	七二会	馬頭観音	弘化4未	馬□□世□
長野市	若穂	地震の神(石祠)		
長野市	信更	鹿島香取神(石祠)	弘化4丁未3・24	当社造立之事 地震天災之節産土神…
長野市	篠ノ井	馬頭観音	弘化4未3・24	
長野市	篠ノ井	馬頭観音	弘化4丁未3・□	馬頭□世音
長野市	篠ノ井	地藏菩薩	弘化4未3・24	
長野市	篠ノ井	鹿島明神(石祠)		鹿島明神
長野市	松代	供養塔	嘉永2年春3月	罹災横死供養塔
長野市	芋井	馬頭観音	弘化4未3・24	馬頭観世音
戸隠	西条	地震塚	弘化4年4・15	弘化四年四月十五日
戸隠	西条	地震塚		願主 枋原村西組
戸隠	西部	馬頭観音	弘化4丁未3・24	弘化四丁未年三月廿四日
戸隠	宝光社	馬頭観音	弘化4・3・24	弘化四
鬼無里	上平	鹿島明神	弘化4未3・24	鹿島大神宮 弘化四丁未三月二十四日大地震ニ附謹立 上手組中
鬼無里	積善	鹿島明神	弘化4未3・24	鹿島大明神 弘化四未年三月廿四日 村中
鬼無里	積善	馬頭観音	弘化4年3・24	弘化四年三月廿四日
鬼無里	共栄	鹿島明神	弘化4丁未歳3・24	鹿島大明神 弘化四丁未年三月廿四日 村中
鬼無里	東京	鹿島明神		天照皇太神・鹿島大明神
鬼無里	裾花	馬頭観音	弘化4年3・24	弘化四年三月二十四日
鬼無里	西京	鹿島明神	弘化4未年3・24	鹿島大神宮 弘化四未年三月二十四日 村中
鬼無里	天神	鹿島明神	弘化4年3・24	弘化四年三月二十四日
中条村	日下野	馬頭観音	弘化4・3・24	馬頭観世音
中条村	御山里	観音像	弘化4・3・24	観音像
中条村	御山里	馬佛	弘化4・3・24	馬佛
中条村	御山里	馬頭観音	弘化4・3・24	馬頭観世音
小川村	高府	馬頭観音	弘化4・3・□4	弘化四未年三月□四日
小川村	高府	鹿島社		
小川村	法地	馬頭観音	弘化4・3・24	弘化四年三月二十四日 「西沢兵左エ門」
小川村	瀬戸川	鹿島神社		不明 板碑状の自然石 文字の痕跡は不明
小川村	馬曲	鹿島神社		不明
牟礼	大字豊野	馬頭観音	弘化4・3・24	弘化四年三月二十四日 石川氏
牟礼	大字豊野	馬頭観音	弘化4・3・24	弘化四年三月二十四日 石川氏
牟礼	大字豊野	馬頭観音	弘化4・3・25	弘化四年三月二十五日 石川氏
牟礼	黒川	名号塔		為地震横死菩提 惣筆子中造立 且方助力

旧市町村	地 区	石造物種類	年 号	記銘文・特徴
牟礼	柳町	馬頭観音	弘化4・3・24	弘化四未三月廿四日 上野氏
牟礼	川上	馬頭観音	弘化4・3・27	馬頭観世音 弘化四年四月二十七日 土屋氏
牟礼	志賀	馬頭観音	弘化4・3・24	馬頭観世音并 地震□而飼馬□死□□□高野氏
牟礼	志賀	馬頭観音	弘化4・3・24	馬頭観世音 弘化四年未三月廿四日
三水	普光寺	馬頭観音	弘化4・3・24	右善光寺 左六川 弘化四年三月廿四日 畑田氏
三水	普光寺	馬頭観音	弘化4・3・25	弘化四未三月二十五日 畑田氏
三水	芋川	馬頭観音	弘化4・3・24	弘化四丁年三月廿四日 村神氏
三水	芋川	馬頭観音	弘化4	弘化四年□□□月廿四日増田氏
三水	芋川	愛染明王	弘化4・3・24	弘化四未三月二十四日
三水	倉井	馬頭観音	弘化4・3・24	馬頭観世音 地震弘化四年三月廿四日 原氏
中野市	平野	馬頭観音	弘化4・3・24	馬頭観世音 弘化四未年 三月廿四日
中野市	平野	馬頭観音	弘化4・3・24	馬頭観世音 弘化四年三月廿四日 堀内氏
中野市	平野	馬頭観音	弘化4・3・24	弘化四年 未三月廿四日
飯山市	飯山	慰霊碑	安政6・3	地震圧死精霊塔(往年弘化丁未季春祭幣之大地震…)
飯山市	飯山	馬頭観音	弘化4・3・24	弘化四未年 三月廿四日 山口氏
飯山市	飯山	地藏菩薩	嘉永元・3	維時嘉永元星舎戌申 三月二十五鳥…
飯山市	秋津	馬頭観音	弘化4・3・24	弘化四未三月廿四日 中山氏
飯山市	秋津	馬頭観音	弘化4・3・24	柳沢氏 弘化四未年三月廿四日
飯山市	木島	馬頭観音	弘化4・3・24	弘化四未年 三月二十四日
飯山市	木島	馬頭観音	弘化4・3・24	弘化四未年三月廿四日 上新田村 与右エ門
飯山市	瑞穂	馬頭観音	□□□・3・24	□□□□□ 馬頭観世音 三月二十四日
更埴	栗佐	鹿島社	弘化4・3・24	
更埴	寂蒔	鹿島社	弘化4・3・24	弘化丁四年未三月十四日
更埴	稻荷山	供養塔		弘化丁未地震稻荷山驛横死人□□碑 碑文省略
更埴	八幡	鹿島社	弘化4	鹿島大神宮 三月廿四日大地震造替
更埴	桑原	供養塔	不明	地震横死群霊

出典：『長野市の石造文化財』Ⅰ～Ⅴ、『鬼無里の石仏―石造文化財調査報告―』、『戸隠村の石造文化財』、『牟礼村の石造文化財』、『三水村の石造文化財』、『中条村の石造文化財』、『小川村の石造文化財』、『中野市の石造文化財』、『飯山市の石造文化財』、『更埴市の石造文化財』などにより作成。

図3-13 善光寺地震関係石造物割合



第8節 まとめ —情報の心性—

善光寺地震における災害情報の特徴は、一瞬で起こる地震の情報が長期にわたってニュース性を保ち、様々な形（情報）で広まり、消費された点にある。その理由には、次の4点が考えられる。

- ①岩倉山の崩落、犀川など河川の湛水、4月13日の犀川決壊による水害と、震災、火災、水災と様々な災害が複合的に起こり被害を長期化させたこと。
- ②推定マグニチュード7.4とされる本震の大きさに加え、余震が長く続き、人々の不安を助長させたこと。
- ③被災地が信濃では飯山、須坂、松代、上田、松本の各藩、塩崎知行所、中野、六川、中之条の代官所、善光寺領、戸隠、八幡などの神領、越後では高田藩、川浦代官所と範囲が広く、被災者も多かったこと。
- ④善光寺では回向開帳中が行われており、全国から参詣者が集まりこの地で被災したこと。彼ら被災者が帰郷するにしたがって、その道中で災害情報が広がり、その情報に触れた近親者は、被災者の安否確認又は死亡した者の遺骨の引き取りへと被災地を訪れた。地震の被害を目のあたりにした縁者は、帰郷してさらに細かな情報を伝え、そこに時間の幅が生まれた。

地震の被害は、自分たちが想像したものよりも大きければ大きいほど、驚愕と恐怖の度を増し、それが現実か否かを確かめるために人々は競って情報を求めた。そこに情報が商品としての価値を持ち、様々な人が介入し、情報を商品に仕立てた。地震の衝撃を受けた人々の精神は、その衝撃によって過敏になり、そのことによって想像力を刺激され、様々なタイプの情報を生み出しては消費していった。

これまで見てきた読売や災害絵図、錦絵や戯文などは、地震という目に見えない恐怖に、自らが文字や図、絵などで形を与える行為であった。特に絵図型読売や災害絵図は、漠然とした恐怖の対象である災害を、地図上に呈示することで、災害の終焉を示す行為でもあった。凡例で被害の状況を示された村や被災範囲は、それを現実と対比しながら受け入れることで、はじめてそれ以上でも以下でもない現実を受け止めることができたのである。人々は様々な情報をつくり、それを消費することによって、自らを納得させ、安堵しようとしたのである。また、鯰絵や戯文は、恐怖をわざと笑い飛ばしたり、揶揄することによって少しずつ地震の恐怖心を解放させたのである。

現在の私たちが目にすることのできる資料は、災害情報全体のほんの一部に過ぎない。多くの情報は口々に伝えられ、消費されては消えていき、またある情報は人々の心の中に刻まれていった。被災地で作られた災害記録の中には、文字化することによって地震の惨状が矮小化されてしまうことを恐れ、記された地震の惨状が、決して作り事ではなく、恐ろしく残酷であっ

たことを記憶にとどめ、災害の風化を懸念したものがあつた。このことは逆に、地震を書き留めることで、地震が相対化され、恐怖心を解放する鎮魂効果があつたことの裏返しでもあつた。

【第3章注釈】

- 注1) 『新収日本地震史料』第五巻別巻6—1、2 1988・3 (以下特に断らない限りは史料の引用はここからである)
- 注2) 『むしくら日記』『新編信濃史料叢書』第9巻 1973・6
- 注3) 『大沼日記』その一「駒ヶ根市誌編さん紀要」第四集 駒ヶ根市教育委員会 1986・3
- 注4) 『御用并町方留』 浦野治郎氏所蔵
- 注5) 北原糸子『近世災害情報論』 塙書房 2003・5
- 注6) 『訂増 大日本地震史料』第3巻 1976・3
- 注7) 『摺物総合編年目録』(第二稿) 東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター2000・7、『風説留中画像史料一覽(稿)』 東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター 1999・3
- 注8) 今田洋三「江戸の災害情報」『江戸町人の研究』5巻 吉川弘文館 1978・11
- 注9) 真田宝物館所蔵
- 注10) 長野市立博物館所蔵
- 注11) 小林源吾「弘化大地震と更埴市の村々」『ちょうま』創刊号 更埴郷土を知る会 1980・10
- 注12) 長野市立博物館所蔵
- 注13) 板木、長野市丹波島 堀清巳氏所蔵・摺物、長野市立博物館所蔵
- 注14) 降幡浩樹「善光寺地震の絵図型瓦版について」『歴史地震』第16号 歴史地震研究会 2001・3
- 注15) 長野市立博物館所蔵
- 注16) 北安曇郡池田町 上原卓郎氏所蔵
- 注17) 長野市立博物館所蔵
- 注18) 『国史大辞典』 吉川弘文館
- 注19) 原與氏所蔵
- 注20) 『小県郡史余編』 小県郡役所編著 小県時報局 1923・3
- 注21) 同上
- 注22) 長野市立博物館所蔵
- 注23) 『長野県史』通史編 第6巻近世(3) 第3章「養蚕業の発達と商品流通」
- 注24) 杉 仁 「蚕書にみる近世社会」『歴史評論』No.664 2005・8
- 注25) ジェラルド・グローマー『幕末のはやり唄一口説節と都々逸の新研究』名著出版 1995・10
- 注26) 棚沢龍吉『叙事民謡善光寺大地震』 銀河書房 1976・9
- 注27) 長野市立博物館所蔵
- 注28) 宮田登・高田衛監修『鯰絵』 里文出版 1995・9
- 注29) 東京大学社会情報研究所所蔵
- 注30) 上田市別所北向観音堂所蔵
- 注31) 長野市安茂里正覚院所蔵
- 注32) 『大町町史』第2巻 原始・古代・中世 大町町史編纂委員会 1985・9

コラム 牟礼宿周辺の被害と富くじによる復興

1 飯綱町域の被害

2005（平成17）年の町村合併によって上水内郡飯綱町（旧三水・牟礼村）となった地域は、善光寺地震の震源域の真上に位置し、激震地帯として甚大な被害があったことが知られている。地震当時の所領関係は、旧三水村域は飯山藩領、旧牟礼村域は主に幕府領であった。

このうち旧三水村域は、善光寺・芋川・倉井・赤塩・東柏原5か村及び川谷村の一部であり、飯山藩領の村々の多くがそうであるように、被害内容の公的な統計史料があまりよく残っておらず、土砂災害や家屋倒壊などの物的被害については、詳しい被災状況を知ることができない。ただし、人的被害については、郷土史家の高野誠氏が宗門改帳などから三水地区住民の檀家寺院を特定し、各寺院が所蔵する過去帳の中から地震で死亡したと推定される人数を抽出しており、その合計は127人に及んでいる。三水地区の地震当時の総人口は4,000人強と見られるので、相当の家屋倒壊などの物的被害が想像される。また、高野氏の調査では、過去帳を資料としたことで性別や年齢を知ることができ、全体的に女性や子どもの死亡者が多い傾向であるという。また、善光寺御開帳に参拝していて被災した者も5人確認されている。

旧牟礼村域は22の村があり、このうち19か村について統計記録が残っている。この一帯は震源地に接する地域であったことから、被害はより激しさを増し、合計800軒のうち全半壊家屋715軒、全半壊率は89%という数値に達した。合計人口3,130人中、即死者は191人にのぼっている。

2 牟礼宿と周辺の被害

とりわけ北国街道の宿駅で、善光寺以北の水内郡北山部では主要な町場であった牟礼宿では、全189戸のうち172戸が全壊（全壊率96%）、火災で10軒ほどが焼失し、村人826人のうち死者88人、負傷者87人という壊滅的な被害を受けた。宿場ではこのほかに、参勤交代の先乗りで本陣に宿泊していた加賀藩大小姓組土肥吉之丞ら一行のうち5人が死亡、善光寺御開帳参拝に向かっていた越後高田藩士一行なども被災したことが知られ、村方の統計にあらわれない宿泊客の被災者数も相当あったことと思われる。宿内で発生した火災は、町のほぼ中央にあった「湯屋」が火元となり、街路の南側家屋を東西に燃え広がったが、幸い全町的な大火にならずに10軒ほどを焼いて鎮まった。

このとき本陣で被災した先の加賀藩士らは、炎上する隣家で倒壊家屋の下敷きになり抜け出せない「啞者^{あしや}」の小児が助けを求める声をあげられず、救出が遅れて間に合わなかったのを目の当たりにし、憐憫^{れんびん}の情を書き残している。このほか、宿駅に欠かせない存在であった馬は15匹死んだ。通常なら村の馬捨場で処理するところであるが、あまりに多数なので3日後の27日にまとめて鳥居川へ流された。

また、牟礼宿東隣の黒川村の近藤莊太夫は「五更の頃、西南の方向に善光寺町の火の光が天を焦がし、東北の方では牟礼宿の中ほどから火の手が上がり6、7軒焼失」と書いている。当時黒川村は、隣接の中宿・裏新田・新井村とともに幕府領中之条代官所支配であった。牟礼宿をはじめ、この一帯の幕府領の多くは中野代官所支配であり、中野（中野市）までは半日の距離であったが、中之条^{はにしな さかき}（埴科郡坂城町）までは往復2日が必要であった。莊太夫は妻を亡くしていたが、代官所への届けが済まないまでは埋葬できなかったという。「隣家の死者3人と妻の遺体を庭の梅の木の下に並べ、その傍らで亭主が番をした。村役人が中之条御役所へ届出を済ませ、ようやく27日夜に帰村、死体を箱に入れ、あるいは薦^{こも}に包んで葬った。目も当てられぬ有様。近辺の中野御支配所は翌日には手代衆^{てだいしゅう}が廻村し『勝手次第に葬るべし』と沙汰していった。」と恨みごめいた言葉を書き残している。被災直後の段階では、幕府領の管轄領域の相違によって、災害の把握、対応、処置の差がこうした面にも現れていたことを知ることができる。

3 「富くじ」による寺院の復興

牟礼宿の街路の突き当たり、町並みを見下ろす高台^{しょうねんじ}に證念寺（真宗大谷派）がある。街路に面して城郭を思わせる高石垣があるが、このうち参道石段より右側の部分が崩壊し、伽藍の堂宇はすべて倒壊した。この寺には「地震のあと、本堂は富くじで建て直した」という伝承があり、そのとき使用したという抽せん箱や抽せん札、富札などが残っている。残念ながら現時点で富興行が実際に行われたかどうかを直接知る文書等は見つかっていないので、実際に残るモノ資料から、行われたであろう興行の内容を推定してみたい。

富札に記されたくじ引き日は「卯八月十五日開」とある。弘化4末年以後の卯年は安政2（1855）年にあたり、同寺には安政5（1858）年7月1日の本堂棟札が残っている。證念寺は地震から8年後の安政2年8月に富くじ興行で再建資金を捻出、それから3年後の安政5年7月に上棟がかなったと考えられる。

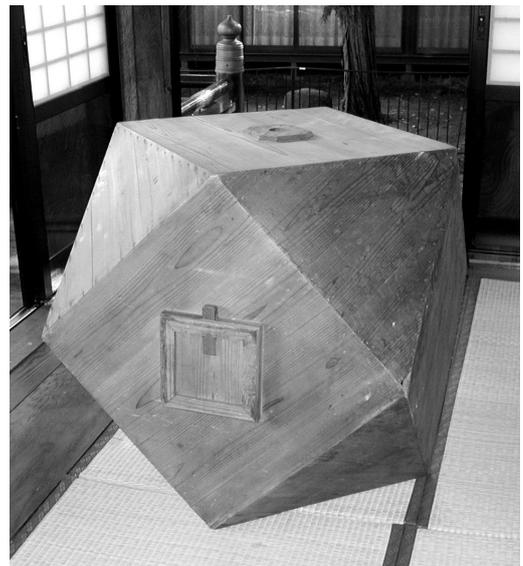


写真3-2 證念寺富くじの抽せん箱
(飯綱町證念寺所蔵、小山丈夫撮影)

富札^{とみふだ}は、表に鶴・亀の2組の図と番号が印される。裏面に興行の名称「本堂再建加入講」とあり、札料^{ふだりょう}（1枚金二朱）、突留^{つきとめ}（1等250両）をはじめ、組違い、前後賞など合わせて800枚の当たりくじと当せん金額、講元證念寺と興行世話人の名が列記されている。札は鶴亀それぞれ3,500枚の計7,000枚を発行。販売収益（二朱×7,000枚=875両）の2割、つまり175両が奉納金すなわち本堂再建資金にあてられることがうたわれている。

抽せん札は桐製の小札で、表裏に組名と番号が墨書されていて、これを箱に入れ錐^{きり}で突き出し、100回分の当せん番号を決定する抽せん方法である。実際に使用した証しに、抽せん札のいくつかには錐による穴があいているが、なぜか総数5,000枚ほどに過ぎず、富札7,000枚には大きく及ばない理由が課題として残る。抽せん箱は縦横120cm、正三角形8枚と正方形6枚の板を張り合わせた14面体の木箱である。中心に横軸を刺した穴が開いており、基台で軸棒を支え箱全体を上下に回転させる仕組みになっていたらしい。これによく似た抽せん箱が喜多川守貞著『守貞謾稿』に

「六方箱」として図示されている。基台に軸棒を備えた回転式の抽せん箱の略図は、證念寺のものと極めて相似している。六方箱が6面の正方形を意味しているとするれば、まさに證念寺の箱は六方箱の実物とあって差し支えないと思われる。

この興行を主催した人々は、富札に書かれた人名によると證念寺檀家であった。金子勘定方^{きんすかんじょうがた}4名はすべて牟礼宿の商家で屋号を名乗っており、經理を担当したと思われる。金子渡方は実質的に資金を保証する役割であったらしく、高野九左衛門（牟礼宿本陣）はじめ名を連ねる4名は證念寺の有力檀家であり、当時近隣の資産家たちであったが、また自らも被災者であった。

彼らは自らの生活の再建を図る中で檀家寺の復興も進めなければならず、その手段として、檀家以外からも広く資金を募ることが可能な富興行を企図したのであろう。興行は被災地以外から多くの資金が流入する絶好の機会でもあり、本堂再建のみならず、被災地の活性化を図る目的もあったのではなかろうか。

ところで当時の富興行は、原則「全面禁止」が前提であった。江戸時代を通じて富興行は全国で盛んに行われたが、庶民の風紀を乱すものとしてたびたび禁令が出され、元禄期以降は寺社の修復を名目にした「御免富^{ごめんとみ}」のみ許可を得て実施できることになった。これもついには天保の改革により全面的に禁止となったことから、善光寺地震当時の富興行は、御免富でない限り禁令を犯しながら敢えて行われたことになる。



写真3-3 證念寺富札

(飯綱町證念寺所蔵、小山丈夫撮影)

実は證念寺と同じように、善光寺地震後の寺院再建に富興行を企画した例がもう一つ知られている。長野市南堀の長命寺（浄土真宗本願寺派）では、地震で本堂と庫裏が倒壊し、本堂は6年後の嘉永6（1853）年にひとまず再建されたが、「造作不行き届き」な箇所も多く、安政3（1856）年に突留（一等）300両の富興行を企画した。すでに富札の販売も始めていたところ、松代藩役人の目にとまり嚴重に中止を申し渡され、結局札を買い戻すことになり、寺世話人と村三役が藩に請書を提出して中止に至っている。このときの富札が今も残っており、内容を見ると札料二朱、発行枚数1万枚、当せん数1,000枚、一等300両と證念寺よりも一回り大きな規模の興行が計画されていたようである。

長命寺の場合は全面禁止の法令に基づき、寺社再建の目的とはいえ、興行は中止された。證念寺の場合は確定的ではないが、どうやら興行は実施され本堂再建は果たされた。短絡的にはいえないが、前者は藩主真田幸貫が天保改革の当事者であった松代藩領の寺院であり、後者は幕府領中野代官所支配地であったことは、両寺の興行の可否を分けた要因であったのかもしれない。

一般的に天保改革以降も、三都以外の地方では各地で根強く富興行が行われたといわれており、このほかにも信濃・越後にかけて、善光寺地震後に発行されたと思われる富札がいくつか残っている。禁令の影で地震後の復興に一役買った大小の富興行が、各地で行われていた可能性は高いと思われる。